

槐

かい

岡井省二創刊

創刊200号記念特集号
平成20年2月号



平成二十二年二月一日発行 第十八巻第三号 通巻第100号（毎月一日一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

狐火

高橋将夫

故郷は雲をかむつて山眠る
刈られずに残りし藍の枯れにけり
考へるうちに葛湯の冷めてきし
自己暗示かけて飲みたる玉子酒

冬木立抜けて遅れを取り戻す
石窟の冷たきマリンドールの絵
金剛界胎藏界も冷ゆるなり
穴深く入りたる蛇や人恋し
狐火に好みの風の来たりけり

祝
槐創刊二百号

槐 二百冊の質量 天の川

二百号からが本番 大花野

「槐」創刊二〇〇〇年記念作品より

吹きわたる野分微熱の大地かな

天野きく江

平泉裏山道の穴まどひ

石脇みはる

蝙蝠に幾何学の闇ひるがへす

犬塚芳子

雲切れて錦秋の山透けて来し

犬塚李里子

薬師仏のうしろの正面穴まどひ

岩下芳子

瓢箪の長さモジリアーニの首

岩月優美子

ひとり居のスローライフや夜の秋

内迫敬子

仏塔の貌して蘭鑄泳ぎぬる

大島翠木

二つ目の踏切りわたる良夜かな

大山里

真葛原もうこの辺でよかろうか

小形さとる

老眼をすなほに掛けよと鉦叩

加藤富美子

顎上げて写楽の細目うなぎ食ふ

久津見風牛

ひととこは石露あかりして明けの星

近藤きくえ

石と語るこころ待ちたし衣被

近藤公子

月光を容れし白磁の杯のあり

近藤紀子

滴りの尽きることなき地球かな

近藤喜子

柿熟るる蒼天に色添へにけり

柴田靖子

島に一つのもの多しアボガドの実

鈴木勢津子

祝敬老団十郎の飴の缶

瀬川公聲

河童の一物ふぐり十一月の妙見湯

竹内悦子

立春の庭に翁の下駄の音

竹中一花

鶏頭に蒼天のあり木椅子あり

谷村幸子

オーボエの音色ひろぐる春野かな

寺田すず江

白楽天の軸掛かりたる夏座敷

西川 操

萩の花折りて笑みたる女かな

西村純太

冴えてをるネオンの下に生き菩薩

橋本正二

落合や芒の影を出でにけり

橋本順子

指先より痺れとれゆく花槐

延広禎一

雨去りて枯野を華と見たりけり

本田俊子

虹の橋めざしてをりし漢かな

松原伸子

耳垢のうすいろなりし白牡丹

松本桂子

春潮に素足あそばせ汀かな

南 一雄

師の句碑のぐるりあまたの七変化

松下八重美

白服のメフィストフェレスが徘徊たもとほる

柳川 晋

束の間の秋夕焼やハーモニカ

吉田順子

槐安集

水野恒彦

歳月の継目たしかに冬董
梅町三の五とは星月夜
小春日の詩人笑へば馬の目も
憂国忌ふたたびみたび冬日さす
九竅きゆうきやうの身にとりつきし風邪の神

延広禎一

機十回大会主宰筆
筆 太き影の一字や鳩
神鏡に野猿の合掌山眠る
微熱ある女のやうに冬櫻
冬の蛾の團十郎茶懺悔室
焰硝のほひを纏ふ枯蠹螂

加藤みき

元日や利久鼠の海と空
海深く眠る抹香去年今年
極月や海も閑伽井もぬくとかり
風にまじる千鳥のこゑやエア・ポート
冬の雨アールグレイのかほり満つ

石脇みはる

黒焦げの芋蛸となり小六月
芋と黒豆いらんかえいらんかえ
木枯や蒸気むらさき色となる
冬の川楮をつけて洗ひをり
花八ツ手どら焼一つ食して昼



中島陽華

C・Dの恋文大白鳥の渡り
空海の寺に来てをりもみづりぬ
雪女ささら電車に乗つてをり
秋の日の狩場のあとの痒さかな
われからや大輪の菊並びあり

竹内悦子

柗の花匂ひくる青不動
内庭の千両万両実南天
そこここに落ちてくわりんのよく匂ふ
天空へ伸びる光や黄仙蓼
一日をゆつくり冬の青蓮院

栗栖恵通子

凧や鮑の穴のままである
鉤の手に狐火さかるあたりかな
たとふなら肩張つてをる寒牡丹
木の柱紙の襖に不動尊
鮫鱈や風袋なんぼ引いてある

大島翠木

鴛鴦や例へば胸乳まで濡らし
朴散りぬ岡本太郎の瞳持ち
冬眠の空気石垣もどもぞす
喉仏メタセコイヤの枯れ仰ぐ
露律に日の差してゐる晩年か

雨村敏子

月面の向かうの地球去年今年
硝子窓拭きし明るさ小鳥くる
立冬の朝のもの音青丹よし
通草提げいくつも辻を通りけり
無の一字大書したりき鷹渡る

本多俊子

地には地のぬくみのありて黄落す
石ころよぽつんと一つ秋天下
しんかんと夜風の匂ふ白障子
土器文様の呪文めきたる冬の空
晩年のわれをつつみし松葉酒

小形さとる

大綿の湧いて離れぬ面ひとつ
冬タンポポ些事を温めぬたりけり
手放して泣いてくれたる九年母かな
やすやすと女は泣けりアキザクラ
木の股に生まれて空也念仏かな

天野きく江

反骨も少年のもの冬桜
人に木に阿伽陀生なしたる紅葉かな
オブラートに若き日包む返り花
飛び来たる紙一枚と菊を焚く
冬の月こころ野性に戻りゆく

槐市集

貴志尚子

初時雨向かう岸より渡りくる
天に立つ煙の上を鴨来たる
ゆつくりと日の入る中の冬かもめ
鮫鰯や腹探らるる検診日
門灯へななめの雨や牡丹鍋

久保東海司

書初めや硯に貰ひ神の水
ぼうたんの火種が程の芽を愛す
切山椒佛の父母に味を問ふ
餌づけたる雀初日を小走りに
柄のゆるみし鍬を浸すや雪解川

近藤きくえ

雁渡しし父母の音して道具蔵
川きらら蕪村の句碑と返り花
源八の渡しし舟跡草紅葉
荔枝裂け種すさまじき真くれなゐ
ひと叢の芒に銀の雫かな

近藤公子

もういいかいまあだだよ暖冬だよ
実柘榴の笑ひて人を引寄せり
秘めごとや通草のはぜて笑ふなり
裸木抱くやわたしも生きてます
うかと口走り鳩の潜りけり



槐集

高橋将夫選

木洩れ日のやうな余生や胡桃割る

岡崎

加藤富美子

己の影見つめて座る初冬かな

浮世絵の女の素足冴え返る

石棺の霜を帰心と思ひけり

落ちる日の早さの見えて大冬木

石榴手に二河白道ゆく途中

宗像

南 一雄

思ひ断つ秋の滝なりとどろける

色なき風冥府の裏戸あけにける

天高し毘沙門天の剣ますぐ

蛤とならむ雀の片言葉

夢の世にまるめるを煮て笑ひけり

枚方

富松 寛子

諸洗ふふくろふがぬて象がぬて

たからかに風のカノンや薄原

玉も毒もふところ深く山眠る

林檎摘むエヴァの覚悟もなきままに

魯田にからす不穏な群れをなす

福井

久津見風牛

柿紅葉急に鼻声発しをり

波といふ波三角に冬に入る

思ひつきり柿食ふ鴨をおどしたき

霜月の霜に紛れて人に伍す

走る子について柞の落葉踏む

京都

竹中 一花

冬の日に手足笑うて坐りけり

眠る山の寢息となりし松の風

飛び立ちし鴨の水音の崩れをり

助六も奴もいやさあ顔見世だ

受け継ぎし炎なりけり神迎え

枚方

中野 京子

懸崖の菊の香にをる水輪かな

繚ぬいとりの錦の水ぬいとり面ぬいとり鳩ぬいとり

神無月石の中着繩の紐

身に痛き木の実つぶての空なりし

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

落ちる日の早さの 見えて大冬木 加藤富美子

大きな冬木ごしに日が沈んでゆく。冬だから日の入りは早い。大空に向かって枝をはる冬木があつて、いつそう早く沈むように感じられたという。何もないうより、対照物があった方が早さの実感が湧くということだろう。よく見ていると思う。

見ているのは夕日ばかりではない。

木洩れ日のやうな余生や胡桃割る (二月号槐集)

己の影見つめて座る初冬かな

石棺の霜を帰心と思ひけり

礁冷や白鷺おのが身を映す (二月号槐市集)

障子貼り大正遠く生きてをり (十二月号槐集)

幸せのこんな大きな麻ぶとん (十一月号槐市集)

曼珠沙華わが身わが魂わが宇宙 (十月号槐市集)

見据えているのは実はご自身の余生だと感じた。

石榴手に二河白道ゆく途中 南 一雄

二河白道は火の河と水の河に挟まれた細く白い道。西方浄土への道のたとえで、火の河は瞋恚(しんい、怒り)、水の河は衆生の貧愛(とんあい、執着)、白道(びやくどう)は浄土往生を願う清浄の信心を表すという。作者は手術で大病を克服したが、今度は別の病気の痛みと闘わなければならなくなった。そんな作者の心に来来するのが掲句の景。手にする石榴は捨てられるものなら捨てて、心身ともにかろやかにになりたい心境かと拝察する。

玉も毒もふところ深く山眠る 富松 寛子
玉石といひ毒茸といひ、どれも人間の都合による価値判断にすぎない。山はそれら一切を懐に納めて眠っている。赤子の寝顔ほど無心でかわいいものはない。そして、山の眠る姿ほど安らぎを感じさせるものはないと思う。

魯田にからす不穏な群れをなす 久津見風牛
鳥が群れている姿はどこか不気味。それを不穏な動きと感じたところに、なにか人の世を連想させるものがあつておもしろい。魯田には稲の切り株から新たに生じた茎の緑がある。救いがある。稔り田でなくてよかつたという気もする。

眠る山の寝息となりし松の風 竹中 一花
冬山に松風だけの景。松に吹く風を山の寝息と感じとつたとこゝろに共鳴した。静かに眠る山の寝息に私はむしろ暖かさを感じる。まさに、季語が息を吹き返したといったところ。

受け継ぎし炎なりけり神迎え 中野 京子
神迎えの神事かなにかで炎を受け継いだという。火は古来より神聖なものととして、大切にされてきた。と同時に、火はまた災害をもたらす恐いものでもある。そんな重いものを作者は心に受け継いだのかもしれない。

透明に十一月の 笹かな 中田 禎子
笹はもともと見えるものではない。しかし、「寒さが身にしみるようになると、北風に返る笹も透明に感じられる」という感覚にはおおいに納得させられる。「十一月」の硬質な季語が笹の透明感をより強めて効果的。